

# 日本基礎教育学会

(The Japanese Association of Fundamental Education)

一緒に21世紀の日本の教育を考えましょう。

会報 No.41

令和3年2月2日

## 令和2年度 日本基礎教育学会月例会

日本基礎教育学会では月例研究会を持ち、基礎教育のあり方について、先駆的な実践を進めておられる先生方より報告をいただきながら、研鑽を積んできた。令和2年度の月例会は、コロナ対応のため、安全を優先し、WEBでの開催とした。第1回月例会を以下のように実施した。

### <第1回 Zoom 月例会>

- |        |                       |             |
|--------|-----------------------|-------------|
| 1 日時   | 令和3年1月23日(土)          | 15:00~16:30 |
| 2 発表内容 | 「小学校における外国語指導の実際」     |             |
| 3 発表者  | 林 宣之氏 (福生市立福生第一小学校校長) |             |

平成15年、『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』が示された。グローバル化が急速に進展し、国境を越えた移動が活発となり、国際的な相互依存関係が深まるとともに、国際的な経済競争が激化し、果敢な挑戦が求められる。また、地球環境問題など人類が直面する地球的規模の課題の解決に向けて、国際社会を生きるという広い視野とともに、国際的な理解と協調が不可欠になっている。

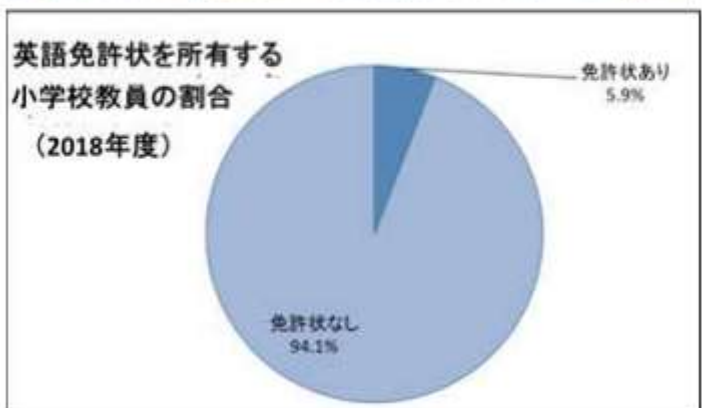
平成18年、「教育課程部会審議経過報告」では、学校教育において国家戦略として取り組むべき課題として、外国語教育が挙げられている。

令和2年度、小学校では新しい学習指導要領がスタートした。3・4年で「外国語活動」が35時間、5・6年で「外国語」が70時間実施されている。教科書もでき、各校での取り組みが始まった。一方、英語免許状を有する小学校教員は6%に満たないという状況もあり、大きな不安を抱えた状態で学校現場は動き出している。

林先生は、外国語を新学習指導要領における最大の改訂の一つであるにとらえ、校内研修・研究を行い、外国語の授業力向上に学校として取り組んでおられる。実践の報告とともに、コロナ禍の時代の学校運営についてもお話をいただいた。

月例会、参加者は21名であった。

(文責 高橋)

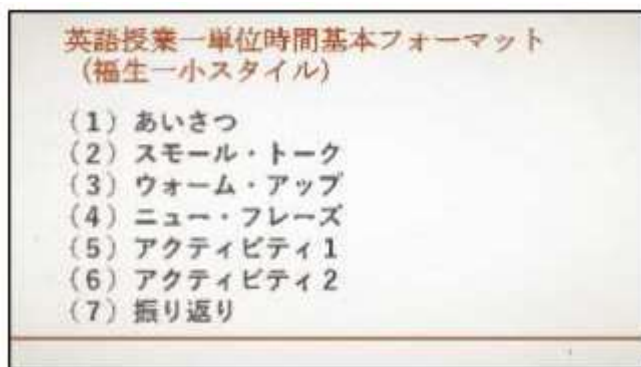


2年間の移行期間を経て、令和2年度から現行の学習指導要領が本則実施となった。言うまでもなく、小学校外国語活動の中学年への前倒しと高学年における外国語の教科化は、今時の改訂における目玉であると同時に、小学校教育現場に大きな改革を求めるものとなった。東京都においては専科教員を配置できる条件を満たす学校は必ずしも多くなく、私の勤務校においても、学級担任が外国人英語指導助手 (ALT) の力を借りながら授業を行っている。移行期間の模索中は、授業をALTに言わば「丸投げ」の状態の学校も見られたが、本校では今年度の校内研究・研修のテーマに外国語を取り上げ、全校体制で学級担任による英語の授業力向上に取り組んだ。以下に本校における主な取り組みについて紹介する。

### 1 一単位時間の授業フォーマットの統一

まず始めに手をつけたことが、初任者からベテラン教員まで誰が授業を行ってもほぼ同じクオリティを担保するため、一単位時間の授業フォーマットを全校で統一したことである。本校ではこの統一フォーマットを「福生一小スタイル」と名付けた。

右図が「福生一小スタイル」であるが、取り立てて特徴的なフォーマットではなく、学習指導要領が目指す目標を確実に達成するための基本に忠実なものとなっている。



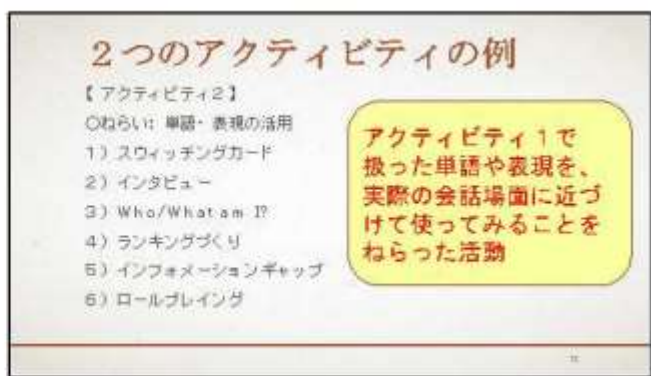
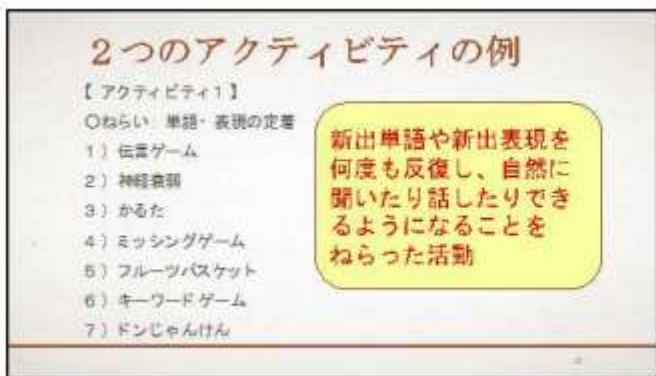
この中からここでは2点について触れることとする。

#### ○ (2) スモール・トーク

スモール・トークとは、英語によるちょっとした世間話のことである。これは学級担任が行ったり、学級担任とALTがやり取りしたり、児童を参加させたり、最終的には児童同士がやり取りしたりする。ここでの世間話は当然、計画されたものであり、本時のニュー・フレーズの先行導入であったり、既習事項のスパイラルなインプットであったりする。とは言え、ここで大切なことは特定の語彙や文構造の理解ではなく、話の内容にフォーカスさせることであることを忘れてはならない。

○ (5) (6) アクティビティ1、2

小学校の外国語の授業では、本時の学習内容をアクティビティによって定着させていくが、「福生一小スタイル」では、ねらいの異なるアクティビティを2種類行っている。1つ目のアクティビティは、本時のニュー・フレーズを定着させるもので、一般的なアクティビティと言えこれを指すと思われる。一方、2つ目のアクティビティは、最初のアクティビティで定着したフレーズを、「自分のことに照らして」「必然性をもって」行うものである。多くの学校ではこれら2つのアクティビティを混在させていることが多いと思われるが、本校では明確に分け、段階を追って行っている。



さらにアクティビティを行う上での注意事項として、アクティビティを「意味ある英語使用の絶好の機会」として捉え、ルールの説明の際も、ALTと会話をしながらデモンストレーションを見せるなど、児童にとって

の大切なインプットとして機能させることとしている。

## 2 ティーム・ティーチング (TT) の考え方

授業を学級担任が行うことのメリットは、大きく分けて2点ある。1点目は、学級担任は **ALT** や外部指導員等に比べて、圧倒的に児童理解ができていることである。授業中の指名一つにしてみても、どの質問がどの児童にとってチャレンジングであるのか、今はどの児童に自信をつけさせたいのかなど、学級担任にしかできない授業進行がある。2点目は、学級担任は児童にとって最も身近な大人であるため、英語を使う日本人のロールモデルになれることである。学級担任が時に流暢に、時にたどたどしく **ALT** と会話を行う様を見せることで、児童の英語学習への動機付けを高めることができるのである。しかしながら、当然のことながら自分の英語力に不安を感じることもあるであろう。そのために **TT** があるのである。

私はこれまで中学校も含めて多くの学校で **TT** を見てきたが、中には **ALT** をあたかも **CD** プレーヤーのようにしか活用できていない教員もいる。確かにネイティブ・スピーカーの発音を聞かせるために、モデル・リーディングをお願いすることはあるが、それは **ALT** の一義的な存在価値ではない。**ALT** は「人対人のリアルなコミュニケーションのパートナー」として教室にいるのである。学級担任や、特に児童との生きたやり取りを **ALT** にしてもらうことこそが、**TT** 本来の目的なのである。

## 3 Content-based な授業になっているか

**Content-based** とは、「内容中心」ということである。ともすると英語の授業は、目標表現を教え込むだけの展開になってしまいがちである。特に小学生は使える語彙や表現が極めて限定されているため、創造的な活動はできないと思われ、避けられてしまうことがある。しかしながら、何のために新しい語彙や表現を学習するのかと言えば、それは自分が本当に伝えたいことを、自分の言葉で発話するために他ならない。外国語を教える教員はこのことを決して忘れてはならないのである。授業では、児童の英語による活動の時間を十分に確保し、単元の終わりには、学習した語彙や表現を用いて（もちろん既習事項も交えながら）、自分が表現したいことを伝える活動をゴールとして設定することが不可欠なのである。

## 4 児童の書きたい気持ちを育てる

外国語の教科化により、高学年において文字指導を行うことになった。中学年での外国語活動では、音声を中心とした活動が行われるが、児童は発達段階が上がるにつれて認知能力も高まり、高学年では文字に対する興味も育ったり、文字による学習支援が効果的になってくる。そこであらゆる機会を通して文字に触れる機会を作り、児童の文字を書きたい気持ちを育てたい。これまでもピクチャー・カードには文字が併記されていたが、それ以外にも例えば、授業の流れや目標表現、教室や廊下の掲示物など、授業の内外を問わず、校内を英語で溢れる環境にしてみたい。本校ではいたるところに英語があふれている。



## 5 GIGA スクール構想による授業改善

**GIGA** スクール構想とは、文部科学省による、令和5年度までに小・中学校全学年の児童・生徒が一人1台のタブレット端末を持ち、公正に個別最適化された学びを全国の学校現場で持続的に実現させる構想のことである。

GIGA とは、Global and Innovation Gateway for All の頭文字をとっており、文字通り本構想の理念を表している。本来は令和5年度までの実現を目指して計画されていたが、新型コロナウイルス感染症による臨時休校等もあり、東京都では今年度中の実現に前倒しをされた。本市では、LTE 通信可能な iPad をすでに全児童・生徒に配布済みであり、学校での授業はもとより、宿題等の自宅学習、学年だよりなどの保護者への連絡などに活用している。導入に当たっては、教員も活用法の研修を自主的に行うなど、取り組みは順調に進んでいる。



英語の学習においては、新出語彙や表現の導入の際の視覚支援としての静止画や動画の提示、教員や児童のプレゼンテーション時の PowerPoint の活用など、今後の一層の研究が必要である。

最後に本校における、新型コロナウイルス感染症対策についても触れておく。予想だにしなかった突然の感染症の蔓延により、今年度はこれまで当たり前できていた教育活動が大きく制限されている。特に学校行事における制限は大きく、入学式、卒業式も児童の歌唱や呼びかけのない簡略化された形で実施し、修学旅行、移動教室といった旅行的行事は全て中止し、運動会も学年を分けての半日ずつの実施とした。何よりも児童の生命、健康を最優先し、教職員一丸となって感染症対策に取り組んでいる。まずは毎日の検温、頻回の手洗い、マスクの着用、ソーシャル・ディスタンスの確保などの基本的な対策を徹底し、児童の健康保持に対する意識を高めている。そのために、混み合う洗面所の床に距離を取るための表示をしたり、指ではなく肘で水道が開けられるように取っ手の付け替えも行った。



また本来楽しみであるはずの給食時ではあるが、全員が一方向を向いて黙って食事をとれるように、教室前方のモニターに動画を映し出すなどの工夫もしている。教職員も感染しない、させないために、職員室の机上にはアクリル板を設置し、飛沫拡散防止などにつとめている。今はただ、明るい明日が来ることを信じて、児童の学びを止めないためにできることを確実にするという毎日である。

